

NHO NEW WAVE

vol.40 2020 Summer

独立行政法人
国立病院機構
National Hospital Organization

研修医・専修医のためのコミュニケーション情報誌
NHO ニューウェーブ

発行：独立行政法人 国立病院機構 令和2年 夏号

SPECIAL

NHO NEW WAVE 10年の歩み

“NHO NEW WAVE” 歴代編集担当者 担当当時のエピソード

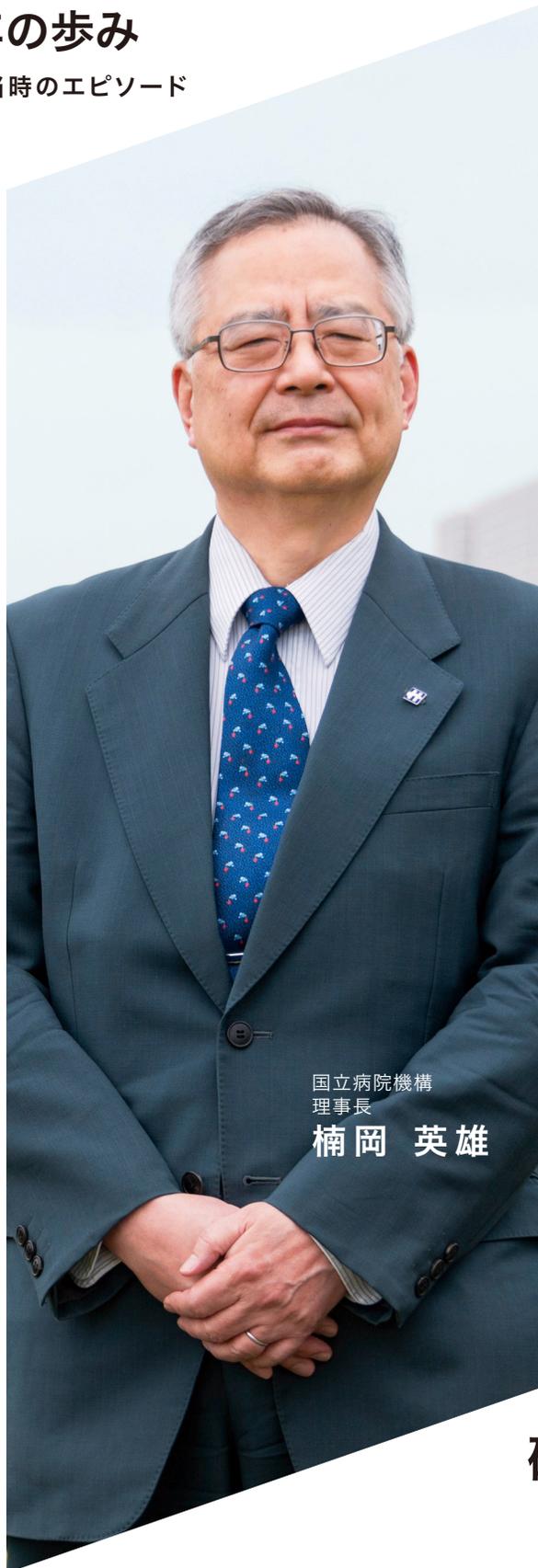
MESSAGE

理事長メッセージ

楠岡理事長へインタビュー
NHOの今後の展望、
研修医・専攻医へのメッセージを語る



東京医療センター
総合内科 医師
山田 康博



国立病院機構
理事長
楠岡 英雄



長崎医療センター
高度救命救急センター 医師
白水 春香

SPECIAL INTERVIEW

研修医時代を振り返る ～10年後の自分～

東京医療センター 山田 康博 / 長崎医療センター 白水 春香

創刊当時、研修医だった二人の先生が
研修医時代からNHOで過ごした10年間を振り返る

— 創刊10周年特別号 —

10th Anniversary

NHO NEW WAVE 10年の歩み

“ NHO NEW WAVE × 創刊の経緯 ”

NHO NEW WAVEは「研修医・専修医のためのコミュニケーション情報誌」というサブネームがあります。平成16年度より開始された初期臨床研修制度により、NHO病院はそれまでの伝統的な教育システムを生かしつつ研修医の育成

が進められていました。専修医制度は、NHO独自のプログラムを持つ病院で研修することにより、現在のサブスペシャリティ領域の専門医に相当する医師を育成するシステムです。新しい専門医制度が開始され、従来の意義に加え、すでにあ

る領域の専門医として活躍している医師が自分のキャリアを見直し、新たに別の領域を学ぶシステムとして活用していただいています。

本冊子は本部主催の研修や、全国の施設の特徴を広く知ってもらうことを目的に、NHO本部人材育成キャ

リア支援室の医師が編集を担当、取材し構成されています。急性期の大病院だけでなく、精神疾患やセーフティネットと呼ばれる重症心身障害児者、筋ジストロフィー、神経難病を主に扱う病院の紹介など、若い医師に役立つことを期待しています。

“ NHO NEW WAVE × 歴代編集担当者が当時を振り返る ”



[担当期間]
vol.1 ~ vol.4

国立病院機構
本部審議役
岡田 千春

現在は本部審議役として、病院・大学などに医師確保・養成で全国を飛び回っている。

創刊時・編集担当時を振り返って

同機構の研修医たちにとって、連帯や情報共有できるツールとして情報誌を企画しました。10年前の企画立ち上げ時、全国院長会議で「いまさら紙媒体では、若い医師は見向きもしない」というご意見や、「これからはWEBで考えるべき」など、この企画を本部内へ通すのに、とても苦労した記憶があります。実際、WEB上に双方向指向のホームページを立ち上げましたが、迷惑メールなどであえなく閉鎖となった苦しい思い出もありました。

思い出に残った企画

創刊号で、当時の理事長矢崎義雄先生と研修医の座談会を企画したことは思い出になりました。「NHO NEW WAVE」というこの情報誌名は、矢崎理事長に命名していただいたものです。

創刊1年目のvol.4制作時には東日本大震災が発生しました。私も医療班のコーディネートのため、岩手県山田町で1カ月にわたり、全国のNHO病院から来る医療班と現地の行

政、医師会、他の医療班との調整を行っていました。並行して作成した同誌の誌面作りには、写真の選別など使命感を持って対応しました。

若手医師へのメッセージ

医療をとりまく環境は急速に変化しています。新たな視点を持ってキャリアを築いてほしいと思います。



編集担当時を振り返って

特集のテーマを決め、構成を練り、現地へ取材に向う、といった仕事が純粋に楽しかったです。ほとんどが初めて向う病院、初めてお会いする方々との仕事でしたので、新鮮かつ刺激的で、貴重な経験をさせていただいたと思います。小児外科医としては特に、小児医療のメッカといえる香川小児病院(当時)、そして後の四国こどもとおとなの医療セン

ターへも訪問させていただき、ありがたい経験でした。また、伺った病院の食堂や研修医宿舎をレポートしたり、編集後記を書いたりもしました。全部が全部、初めての経験でしたが、若い先生方に興味を持ってもらうにはどうしたらよいのか試行錯誤の連続でした。

思い出に残った企画

個人的な興味で毎度伺っていた

「子供の頃の夢」が、いつの間にか医師のプロフィールとしてマストで記載されるようになり、感慨深いです。ちなみに私の子供の頃の夢は「看板屋」でした(笑)。

若手医師へのメッセージ

一人でも多くの若手医師に見ていただきたいので、一読された方はSNSやクチコミでドシドシ宣伝してください！



[担当期間]
vol.5 ~ vol.15

九州医療センター
小児外科 医長
西本 祐子



編集担当時を振り返って

一人でも多くの方が興味を持つ内容ということ、また、一人でも興味があるのであれば情報提供する意味があるのではないかという思いで企画やトピックを選んでいました。

取材では、所属していた病院ですら訪れることのない病院長室に、たくさん訪問させていただきました。院長先生の趣味や好きな音楽などが取材陣と一致して、盛り上がりすぎて時間が押したりしたこともありました(笑)。

思い出に残った企画

vol.23の「重症心身障害児(者)医療」です。良質な医師を育てる研修を企画する中で「重症心身障害児(者)医療」の医療領域を知り、NHOだからこそ経験できる、知ることができる分野だと感じました。実際それまで私自身が知らなかった分野でもあり、研修医・専修医のための情報誌

ではありますが、その他の医療者にも知ってほしいと思った企画でした。

若手医師へのメッセージ

熱心な先生方の良質な研修や、組織力を生かしたフェローシップなど、NHO病院に所属しているからできること、受けられるメリットを、最大限に生かしてほしいと思います。



[担当期間] vol.16 ~ vol.23

九州医療センター 膠原病内科 医師 石田 素子



[担当期間] vol.36 ~ vol.39

小倉医療センター 統括診療部長 高月 浩

編集担当時を振り返って

国立病院機構本部医療部で人材育成キャリア支援室長として、NHO病院医師との併任で勤めていました。その仕事の一つがこのNHO NEW WAVEの編集でした。就任時は情報誌を編集した経験がなく戸惑いが大きかった記憶があります。本部企画役の上司や、出版社の方、事務方など、多くの方に手伝っていただき、何とか企画運営、取材、出版まで進められました。全国各地への取材出張は過酷なことも

ありましたが、今では良い思い出です。多くの若手医師にとって、興味・関心のあるものを作ろうという思いで、毎回企画を考えていました。

思い出に残った企画

最初に企画した、vol.36の「がん治療最前線」です。私も血液内科医であり、悪性腫瘍治療にも関わっていますので、自分自身が興味を持ったことから企画化しました。

若手医師へのメッセージ

国立病院機構には、このNHO NEW WAVEや、良質な医師研修、国内外の短期留学制度など、若手にとって魅力的な制度がたくさんあります。ぜひ活用していただき、またNHO病院でもそのことを活かしてほしいと思います。



NHO NEW WAVE × 歴代編集者の紹介



[担当期間] vol.24 ~ vol.27
仙台医療センター 副院長 鵜飼 克明

思い出に残った企画

最初の企画「新専門医制度」です。研修医の皆さんに理解してもらうため3頁に渡って解説しました。



[担当期間] vol.28 ~ vol.31
九州医療センター 医療管理企画 運営部長 福泉 公仁隆



編集担当時を振り返って

取材を通して、皆さんの情熱(NHOプライド)を感じました。



[担当期間] vol.32 ~ vol.35
大阪医療センター 肝胆膵外科 科長 宮本 敦史

“新編集担当者 × あいさつ”

令和2年4月1日付けで本部人材育成キャリア支援室長を拝命いたしました。普段は呉医療センターの脳神経内科医をしております。東京と呉を行き来する生活のはずでしたが、COVID-19流行の影響で現在は呉にいながらテレワークで業務を行っていることが多いです。人材育成キャリア支援室は、NHOの良質な医師を育てる研修をはじめ種々の研修、セミナーに関与し初期研修や専門医制度の情報を収集して各施設と共有することが重要な役割になっています。その中でNHO NEW WAVEについては、かなり自由度高く構成を任せております。将来NHO病院で勤務することも選択肢として考えていただくため、医学生の方にも興味を持っていただけるような誌面構成を考えていきたいと思っています。

COVID-19の影響がまだまだ続き、取材もままならない状態ですが、編集を担当された諸先輩方の熱意はそのままに、さらに親しみやすい情報誌となるよう心掛けてまいります。このような状況下で取材を許可していただいた病院、先生方にはお礼申し上げます。読者の皆さんの声も力になりますので、ご意見もよろしくお願いたします。

国立病院機構本部 人材育成キャリア支援室長 鳥居 剛



SPECIAL INTERVIEW

研修医時代を振り返る ～10年後の自分～



INTERVIEW.

01

人に恵まれ、若手医師が活躍できる環境が 医師として大きく成長させてくれた

東京医療センター 総合内科 山田 康博



■ 今までの勤務歴

2004

久留米大学病院 初期臨床研修医

2006

国立病院機構 東京医療センター 総合内科 レジデント
上記研修中に以下院外研修

2007

国立病院機構 さいがた病院 出向

2008

国立病院機構 栃木病院 出向

2009

総合内科チーフレジデント

2010

聖路加国際病院 聖路加ライフサイエンス研究所にて臨床研究
Veterans' Health Administration Greater
Los Angeles Healthcare Systemにて研修

2011

国立病院機構 東京医療センター 総合内科 医師

■ 資格

日本内科学会 総合内科専門医・指導医
日本プライマリ・ケア学会 認定医・指導医
American college of physician member

医師としての大切な“勘”を養った 豊富で多彩な症例経験

卒後3年目の後期研修から「東京医療センター」の総合内科に勤務しています。当院を研修先として選んだ理由は、当時から総合内科に実績のある数少ない病院の一つだったこと。見学時に後期研修医の先生方に話を聞くと、他病院ではネガティブな発言をする先生が多いなか、当院の先生方は「忙しいけれど、本当にいい病院だよ」とポジティブな言葉ばかりだったからで

す。医師が忙しいのはどこも同じ。忙しくてもやりがいを持って楽しく働くことができるか。大きな学びと成長があるか。当院にはそうした環境があったと感じましたし、入職してからもその印象はずっと変わっていません。

当院は740床という大規模病院にも関わらず、他部門や他科との風通しが良く、仕事のしやすい環境にあります。臨床としては、幅広い症例の患者さんが集まる病院であり、救急外来では風邪や肺炎などのありふれた疾患から、くも膜下出血、心筋梗塞、消化管の穿孔という緊急性の高い疾患まで幅広く経験できたことで、重篤な疾患を見逃さない医師としての大切な“勘”を養うことができました。



先生方の出身大学はさまざまであり、全国のグループ病院から若手医師が集まる勉強会など交流も盛んで、幅広い考え方を自然と学ぶことができる環境です。研修では複合プログラムにより、それぞれに得意領域や特性のある全国各地のグループ病院で経験を積むことも可能で、私は「栃木医療センター」でも研鑽を積みましたが、その際は身分や処遇が変わることなくスムーズに研修を続けることができました。こうしたことも国立病院機構ならではの大きな魅力だと思います。

学ぶ意欲とやりがいを生む 優れた指導と教育環境がある

当院には屋根瓦式教育が根付いており、早くから指導者としての経験も積むことができます。また、若手医師が中心となって勉強会を開き、発表や提案したことが上の先生方に認められ実臨床に還元されることも多々経験しました。さらに私が入職した当時は総合内科の医師が少なく、後期研修医であっても組織づくりに大きく関わることができ、リーダーシップも学びました。振り返ると、人に恵まれた10年間であり、学ぶ意欲とやりがいを生んでくれた先生方の指導や若手医師が活躍できる環境が、自分をここまで成長させてくれたのだと感じています。

医師になると、学んだことや教科書通りにいかないなど、医療の不確実性を実感することが多々あります。そうしたなかで最適な医療を提供するためには、主体的に学び、考え、経験を積み重ねていくことが重要です。診療では患者さんの訴えをしっかり受け止め、身体所見、生活背景、価値観について、誰よりも一番詳しくなることを心掛けてほしいと思います。そして、上級医にどんどん意見や提案をしてください。それが新たな学びとより良い医療を生み、さらなる成長に繋がるはずですし、国立病院機構にはそれができる環境があります。



同期との集合写真



PROFILE

出身地 : 長崎県長崎市
出身大学 : 久留米大学(2004年卒)
宝物 : 家族
座右の銘 : 一期一会



PROFILE

出身地 : 福岡県太宰府市
 出身大学 : 久留米大学(2010年卒)
 趣味 : 寝ること、食べること
 宝物 : 家族
 座右の銘 : 人事を尽くして天命を待つ

**教育に実績があり、雰囲気も抜群
積極的な研修ができる環境です**

初期研修から「長崎医療センター」でお世話になり、現在は救急医として当院の高度救命救急センターにて日々、診療に励んでいます。当院を研修先を選んだ理由は、説明会や見学時の雰囲気が抜群に良く、研修医の先生方の生き生きとした姿を見て、ここでなら積極的に経験を積むことができると感じたからです。当院は離島医療を担う医師を育成する使命があるため、現在の初期臨床研修制度が始まる以前から複数診療科によるローテーション制度を取り入れてきた医師教育に実績のある病院です。どの診療科も教育熱心で教育体制がしっかりしており、また、誰にでも相談しやすい環境であるため、委縮することなく積極的に研修に励むことができました。



救急の道に進んだのは、初期研修1年目の最後に救急を回った際、救急の基本的スキルを1年間で習得した後に専門科研修に進む後期研修の先生方の姿を見て、「1年でこんなにも救急対応ができるようになるんだ!」と感銘を受けたことがきっかけです。苦手な救急医療を克服したかったですし、どの診療科に進むにしても救急対応のスキルは必要だと思い、最初は一年間だけのつもりで救急を学ぶことにしました。先生方は教育熱心で懐がとても深く、何もできない私を温かく長い目で見てくださり、のびのびと学ぶことができました。救急の面白さも知ることができましたし、日々成長している実感やできるようになった

喜びが、さらなる学びの意欲に繋がりと、救急医になろうと決めました。最初は何もできなかった私が救急専門医の資格を取得し、救急の第一線に身を置くまでに成長できたのは、当院の医療環境や教育体制のお蔭だと感じています。

**患者さんに一番身近な医師となり
常に患者第一で全力を尽くすこと**

研修医時代に教えられた印象的なことは、患者さんとコミュニケーションを取り、その患者さんにとって一番身近な医師になること。患者第一で何ができるかを常に考え、一人ひとりに最適な治療を選択するために全力を尽くすこと。今でもこの教えは、自分が迷ったときの大きな指針となっています。

救急医療は内科的、外科的、全身管理などの幅広いスキルが必要ですし、救急患者さんは短時間でさまざまな変化が起こるため、先を読む力や決断力も重要となります。救急科での研修は将来何科に進んでも医師として大きく飛躍するための土台となるはずですし、自分の行った医療がダイレクトに反映されるため学ぶことも多く、やりがいの大きな診療科です。研修医の2年間は色々な世界を経験できる2度とない貴重な時間です。国立病院機構には、豊富な経験とチャレンジができる素晴らしい医療環境が用意されています。苦手なことであっても積極的にチャレンジすることで自分が進むべき診療科が見つかるはずですし、医師として大きく成長することができると思います。

INTERVIEW.

02

**苦手だった救急医療の面白さを知り
今では救急の第一線に携わる医師に**

長崎医療センター 高度救命救急センター 白水 春香



地域医療研修にて生月病院で研修
休日の平戸観光

■ 今までの勤務歴

- 2010 国立病院機構 長崎医療センター 初期臨床研修医
- 2012 国立病院機構 長崎医療センター 救命救急センター レジデント
- 2014 国立病院機構 長崎医療センター 救命救急センター 医師
- 2018 国立病院機構 長崎医療センター 高度救命救急センター 医師

■ 資格

- 日本救急医学会 専門医
- 日本DMAT隊員
- 厚生労働省認定臨床研修指導医

■ 所属学会

- 日本内科学会
- 日本急性血液浄化学会
- 日本集中治療医学会
- 日本外傷学会
- 日本航空医療学会

“ 海外留学制度を活用して最新医療の現場を体験 ”

ここにしかない目から鱗のような体験 たくさんの発見が詰まった海外留学

四国がんセンター 消化器内科 坂口 智紘

今回、国立病院機構の専修医等海外留学制度を利用し米国防務省にあるWest Los Angeles VA Medical Centerで研修をさせていただきましたので、ご報告いたします。私は消化器内科医ですが、化学療法をもっと専門的に深めたいと思い、現在は四国がんセンターで消化器科領域の化学療法をメインに診療を行っています。以前から疑問に思っていたことの一つに米国では腫瘍内科医がすべての領域の化学療法を担当すると聞いていましたが、どのように実践しているのか、また若手の腫瘍内科医はどのようにトレーニングを受けているのかということがありました。この疑問を解消する絶好のチャンスだと思い、この制度に応募しました。



毎朝の入院チームカンファレンスの様子

West Los Angeles VA Medical CenterではHematology/Oncology(血液内科/腫瘍内科)で5週間の研修を行いました。化学療法の内容は(少なくとも消化器領域に関しては)日本と大きな違いはありませんでしたが、日本と大きく違う点も多くありました。

一つは入院での担当医の制度です。日本では主科があり外来と同じ主治医が基本的に治療を担当しま

すが、米国では総合内科医が一般的な内科治療や診断を行い、症状や疾患別にそれぞれ専門科(血液内科/腫瘍内科や消化器内科など)にコンサルトします。専門科はコンサルトを受け、診断や治療などを行っていきます。すべての領域の化学療法を腫瘍内科が一手に引き受けるとなると仕事量が膨大になるのではないかと考えていましたが、総合内科のフェローやレジデントなどの数は専門科に比べて多く、層の厚い総合内科との連携により腫瘍内科が成り立っていることが分かりました。しかしそうなる一方で、治療方針が定まりにくいというデメリットが考えられますが、それぞれの科の相談窓口が決まっており、すぐに電話で連絡し相談できる環境がありました。また患者さん自身も自立してそれぞれの医師の話聞き、どうしたいかをはっきり伝えるため治療方針は比較的スムーズに決まってくいようでした。ただ、たまに「お互いの科でコミュニケーションが取れていない!」とか「たらい回しにされた!」などと訴える患者さんもいて、デメリットが全くないわけではないようです。



入院ケモは化学療法専門病棟の広々とした個室で受けることができます



外来は注射センターで

また、若手医師のトレーニング方法も日本と異なります。血液内科と腫瘍内科の両方の専門医を目指すフェローは3年間のプログラム(血液内科または腫瘍内科のいずれかだけであれば2年)のうち1年を3つの病院での実習、あとの2年は研究を行います。病院ではフェローは1カ月ごとに入院コンサルト、骨髄穿刺、移植に分かれて診療を行います。私は入院コンサルトチームのフェローに付いて研修を行いました。チームはアテンディング・ドクター(指導医)1人とフェロー1人、レジデント1人の3人で構成されています。チームのメンバーは1カ月毎(レジデントは2週間毎)に交代していくため、カルテに経過や考察、方針などを詳しくまとめて記載します。毎日2、3時間かけてチームで入院患者についてディスカッションを行い、その後回診をし治療方針を決定していきます。また、週2回の外来にもフェローやレジデントが参加しています。フェローやレジデントは初見の患者さんとなるため、その場でカルテを読み、一度自分で診察してから控え室にいるその患者さんの担当である指導医(外来では患者さん毎に担当医が決まっています)にプレゼンをして指導医と一緒に方針を決め、再度指導医とともに患者さんを診察します。このため一人の患者さんに小一時間かかることが多いです。しかし、どの指導医も入院でも外来でも一貫してフェローやレジデントに対する態度は同じで、相手の話を最後まで聞きその上で

ガイドラインなどを用いて理論的にじっくりと説明していました。患者さんも待たされたことに対して理解を示し、怒るような人はいませんでした。入院でも外来でも一見すると無駄が多いやり方のように思いますが、若手医師は幅広い疾患や症例を経験することができ、特に腫瘍内科では、実は効率的なトレーニングの仕方ではないかと思いました。

他にもフィジシャン・アシスタントやソーシャルワーカー、ケースマネージャー(検査の日程調整などを行う)など多職種が合理的に診療やケアを行っており、働き方改革が進められている日本でも参考となるようなことなど、ここに書き切れないくらいたくさんありました。気になる方はぜひ、この留学制度に応募してみてください。自分が当たり前だと信じて疑わなかった環境やシステムでも、「あ、そうか。そうすることもできるんだ」と思える、まるで目から鱗のような体験ができると思います。



みんなで助け合いながら5週間を過ごしました

私はこの研修を通して学んだことを少しずつでも明日からの診療、また後輩の指導に生かしていきたいと考えています。最後になりましたが、快く送り出してくれた四国がんセンターのスタッフの皆さん、また、この留学制度をサポートしてくださっている機構本部の皆さん、West Los Angeles VA Medical CenterのKaunitz先生、秋葉先生、鈴木さん、そして一緒にこの留学を経験した日本各地の4人の先生に感謝申し上げます。

NHO × 海外留学制度

平成18年度から開始した専修医制度の一環で、グローバルな感性と幅広い知識を身につけ、将来後進の指導にも熱心に携わることができる優秀な人材を育成することを目的としています。

留学先はGreater Los Angeles Health care systemに所属するVeterans Affairs Medical Center(VAMC)で約1カ月間、米国の医療現場を体験することができます。

※渡航費・滞在費は国立病院機構本部が負担します。

国立病院機構(NHO)専修医海外留学



“ 総合診療 専門研修プログラムの紹介 ”



地域や働く環境のあらゆる変化に柔軟に対応できる総合力という強み

栃木医療センター 内科医長 矢吹 拓

総合診療医が求められる理由——

背景には、高齢化に伴う疾病構造の変化や医療の専門分化があると思います。具体的には多疾患併存 (Multimorbidity) や治癒しない慢性疾患の下降期、認知症高齢者の増加によって、特定の専門医だけでは対処できない患者層が増えてきたことが影響しています。

総合診療医の役割、魅力、強み——

総合診療医は、一つの領域をとことん追求するタイプの専門性ではなく、複数の領域を横で繋ぐタイプの専門性を有しています。自らが提供できる範囲と専門的な医療が必要な範囲を適切に判断し、ケアのバランスを整えることが役割です。司令塔としての役割を果たしながら、時折ゴールも決めるプレイヤーみたいなイメージでしょうか。また、足し算だけでなく引き算ができる医療を提供することや、どこで働くかによって役割が変わり、それに柔軟に対応できることが魅力であり強みです。

栃木医療センターの総合診療専門研修プログラムについて——

当院の総合診療研修の特徴は、総合的な内科研修と連携を活かした診療所研修です。内科は専門家を含めた全内科医が協力して診療にあたっています。外来・救急・病棟と同時に担当するため、研修医は心不全・肺炎・脳梗塞・糖尿病・胆嚢炎など、多彩な疾患の経験をローテーション研修することなく経験可能です。

診療所研修は、普段から同じ2次医療圏内で連携している在宅支援

診療所で行います。小児科診療から訪問診療まで幅広い研修が可能であり、病院で担当した患者さんを訪問したり、訪問で担当している患者さんの入院担当になったりすることで、患者さんのご家族・生活背景に注意を向け、生物医学的な視点だけでなく心理社会的背景に気付けるようになります。

プログラムの特長——

当院では1dayバック方式を採用しており、病院研修中も週1回は診療所へ、診療所研修中も週1回は病院で研修を継続します。過去には、自ら救急車対応した患者さんの入院管理、退院後は一定期間外来診療を行い、通院困難になった際に訪問診療で看取りまで経験した研修医がいました。地域の多職種と看取り症例を振り返るデスカンファレンスや地域包括支援センターとの地域会議を通して、地域ニーズを知ることもできます。

全国からモチベーションの高い専攻医が集まっており、切磋琢磨しながら楽しく学ぶことができます。多彩なカンファレンスと、指導医からの濃厚なフィードバックを受けることで、エビデンスに基づいたスタンダードな疾患管理を学び、患者背景を意識した診療を提供することができます。

Q 総合診療医に必要なスキルと大切なマインドは？

A 総合診療医には幅広い知識や手技などの臨床スキル以外に、さまざまなノンテクニカルスキルが必要です。また、プライマリ・ケアを特徴付ける5つの理念が **ACCCA** です。

- Accessibility** 近接性
- Comprehensiveness** 包括性
- Coordination** 協調性
- Continuity** 継続性
- Accountability** 責任性

Q 総合診療医になったきっかけは？

A もともとは小児科医になりたかったのですが、初期研修でさまざまな診療科を経験するうちに総合的な診療に魅力を感じるようになりました。そして、東京医療センター総合内科の後期研修説明会で「普通の医師になる」ことを目標としていることを伺い、共感を覚えて門をたたきました。楽しいと思うことを続けているうちに、いつの間にか総合診療的な仕事をするに至ります。興味のある皆さん、ぜひ遊びに来てください！



PROFILE

出身地 : 埼玉県行田市
 出身大学 : 群馬大学 (2004年卒)
 宝物 : Martin D-28
 座右の銘 : “connect the dots”



国立病院機構 栃木医療センター

所在地 〒320-8580 栃木県宇都宮市中戸祭1-10-37
 WEB <https://tochigi.hosp.go.jp/>

栃木医療センターの特長

栃木医療センターは栃木県宇都宮保健医療圏の中心的な急性期病院です。総合診療が可能であり、2次救急病院輪番病院・地域医療支援病院・第2種感染症指定医療機関としての役割を担っています。総合医・各専門医は内科医としての共通基盤を重視し、常に診療、カンファレンス、勉強会などを合同で行っています。それぞれの専門性を共有しながらも、最新のエビデンスに基づいた内科診療を目指し切磋琢磨しています。

症例数が多い

内科単科として診療しているため年間を通じてコモンからレア疾患まで多くの症例を経験できます。

内科学会 J-OSLER 承認済み症例 **全国1位**
 ※2019年1月31日(専門研修のみ)
 ▼専門研修症例平均

91.5

積極的に手技ができる

ローテーション形式ではないため年間を通じて継続した検査・手技が可能でスキルアップはかなり早いです。

指導体制が充実

研修医に好評の外来症例カンファをはじめ多くのカンファレンスや勉強会などで総合内科指導医・各サブスペ専門医からの定期的なフィードバックを受けられます。



栃木医療センター 総合診療プログラム × ローテーションイメージ

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1 年次				内科	栃木医療センター 内科					小児科	栃木医療センター 小児科	
2 年次	総合診療Ⅰ ①宇都宮協立診療所 ②生協ふたば診療所 ③ひばりクリニック			総合診療Ⅱ ①獨協医科大学 日光医療センター ②利根中央病院 ③名瀬徳州会病院 ④県立宇古病院 ⑤健育会西伊豆病院								
3 年次	救急 ①済生会宇都宮病院 救命センター ②栃木医療センター 救急部		総合診療Ⅱ 栃木医療センター 内科							内科	栃木医療センター 内科	

2040年を見据えた医療を推進 日本の将来の医療を支える 主役となる医師へ

理事長 楠岡 英雄 くすおか ひでお

PROFILE

1975年 3月 大阪大学医学部 卒業
1975年 7月 大阪大学医学部附属病院
1976年 7月 桜橋渡辺病院
1977年 9月 大阪大学工学部 助手
1983年 5月 大阪大学医学部 助手
1990年 4月 ジョンスホプキンス大学医学部 助教授
1992年 4月 大阪大学医学部附属バイオメディカル教育研究センター 助教授
1998年 5月 国立大阪病院 臨床研究部長
2003年 4月 国立大阪病院 副院長
2007年 4月 独立行政法人国立病院機構大阪医療センター 院長
独立行政法人国立病院機構 理事(非常勤)
2016年 4月 独立行政法人国立病院機構 理事長



NHO 理念と役割

国立病院機構は、平成16年4月に国の機関から独立行政法人に移行しましたが、国の政策として担うべき5疾病(がん、脳卒中、急性心筋梗塞、糖尿病、精神疾患)、5事業(救急医療、災害時医療、へき地医療、周産期医療、小児医療)を中心に日本の医療を支えています。

加えて、結核や重症心身障害、ALS、筋ジストロフィーをはじめとする神経・筋疾患、心神喪失による他害行為を行った者への精神科医療、アルコールやギャンブル、近年ではスマホの依存症治療など、他の医療機関では難しいセーフティネット分野の医療も担っています。

診療以外に「教育研修」も重要な役割であり、多彩な診療機能や病院ネットワークなどの特色を活かした学生の卒前教育(教育実習)と質の高い医療従事者の育成にも力を注いでいます。国立病院機構では現在の初期臨床研修制度が始まる前から複数診療科による総合研修や、専門医教育に関しても豊富な症例を万遍なく経験できるプログラム制度を先駆的に実施し、数多くの優

れた医師を輩出してきました。

また、豊富な症例数を活かした国際水準の臨床研究や企業試験が活発に行われていることも特徴であり、質の高い「診療」・「教育研修」・「臨床研究」という3つの柱を理念として一体的に推進し、各都道府県における医療の中心的な役割を担っています。



NHO 今後の展望

国立病院機構では、2019年から第四期中期計画期間が始まり、国の方針でもある「地域包括ケアシステム」の構築を2025年までに実現するため、「病院が実施したい医療」から「病院の機能に応じて地域から求められる医療」へ、そして在宅医療との連携を強化し、「治す医療」から「治し、生活を支える医療」への転換を図っています。

また、2040年には高齢人口がピークとなり、社会保障問題など医療状況は厳しくなると予想されています。国立病院機構では、20年後の医療も視野に入れ、将来にわたって質の高い医療サービスを継続するための業務運営を行っています。その一つとして注力しているのがホスピタリスト(総合医)の育成です。今後は更なる高齢化により、複数の疾患を持つ患者さんが増加し、広範囲の疾患をカバーできるホスピタリストを中心に臓器別専門医がアシストする医療体制が欠かせません。これからの日本の医療にホスピタリストは重要な存在であり、日本の将来の医療を担う人材育成、教育環境のさらなる充実を図っていきたくと考えています。

NHO 伝えたいこと

研修医や専攻医の方々には、知識や技術の習得はもちろん、人間力も育んでほしいと思います。人間的に信用されていなければ、いくら高いスキルを持っていたとしても、それを十二分に発揮することはできません。質の高い医療を提供するに

は、患者さんやご家族との信頼関係を築き、説明責任をしっかりと果たすことが大切です。チーム医療においても信頼関係が重要であり、人間力は欠かせません。人間力を身につけるには、まず他人から自分はどうか思われているのかを知ることです。研修中は余裕がなく、目の前のことだけに集中してしまいがちですが、ときどきは落ち着いて周りを見渡し、自分を客観的に見ることをぜひ意識してください。

医学生や若手医師の方々には人口急減、高齢者人口がピークとなる20年後の日本の医療を支える大切な担い手です。国立病院機構の特色を活かした研修や研鑽を通して、将来の日本の医療を支える主役として個性や能力を思う存分発揮し、大いに活躍してほしいと思います。



BACK NUMBER × バックナンバー
過去の「NHO NEW WAVE」が
WEBサイトから観覧できます!

https://nho.hosp.go.jp/education/education_nho.html

NHO ニューウェーブ 検索



次号
予告

NHO NEW WAVE vol.41 は
2020年10月初旬発行予定です。

SPECIAL 専門研修プログラム紹介
HOSPITAL 病院クローズアップ: 静岡医療センター
PROGRAM 初期・専門研修プログラム紹介